

ダニエル書 - 第一百号

ローマの三重同盟：黙示録におけるラッパの預言的意義を解き明かす

Jeff Pippenger

2024-03-01

黙示録9章の第一と第二の災いにおけるイスラムは、ローマにもたらされた裁きを象徴していた。ウィリアム・ミラーは、ラッパを「ローマにもたらされた特有の裁き」と呼んだが、ミラーは世界をハルマゲドンへと導く三重の同盟としての現代のローマを見通すことはできなかった。ユライア・スミスは、ラッパがローマに対する神の裁きを象徴していること、そして第五と第六のラッパ（第一と第二の災い）がカトリック教会に対する裁きであることを認めていた。

このラッパの解説にあたっては、再びキース氏の著作から引用することにしよう。この著者は次のように正しく述べている。「黙示録の他のどの部分についても、第五と第六のラッパ、すなわち第一と第二の災いをサラセン人とトルコ人に適用することほど、解釈者たちの見解がこれほど一様に一致しているものはほとんどない。それはあまりにも明白で、ほとんど誤解されようがない。各々を指し示すための一、二節が与えられているのではなく、むしろ、黙示録第九章全体が、等しい分量で両者の記述に充てられている。」

「ローマ帝国は、興隆したのと同様に、征服によって衰退した。しかし、偽りの宗教が背教の教会への災いとなるための手段となったのは、サラセン人とトルコ人であった。ゆえに、前のもののように第五と第六のラッパがその名だけで呼ばれるのではなく、それらは『わざわい』と呼ばれる。」ユライア・スミス『ダニエル書と黙示録』495。

ミラーとスミスが、ローマに対する神の裁きとしてのラッパについて認識していなかったのは、それらの裁きが太陽崇拝の強制によってもたらされたという点である。321年、コンスタンティヌスは最初の日曜法を制定し、9年後には首都をローマからコンスタンティノポリスへ移し、こうしてローマ帝国の分裂の過程が始まった。ダニエル書第11章では、異教ローマは『一時』の間、絶対的に支配することになっており、この『一時』は、紀元前31年のアクティウムの海戦から、コンスタンティヌスが帝国を西と東に分割した西暦330年までの360年を表していた。

彼は、その州の最も豊かな所にさえ平穩に入り、彼の父祖もその父祖も行わなかったことを行い、彼らの間に獲物と戦利品と富を散らし、さらに、しばらくの間、堅固な要塞に対して自らの計略をめぐらすであろう。ダニエル書 11:24。

その三百六十年のあいだ、ローマ帝国は事実上無敵であったが、首都が東方に移されると、これほど巨大な帝国を統治する力はもはや保てなくなった。コンスタンティヌスは、帝国を三人の息子の間で分割することで支配の維持を試みたが、それはむしろ旧帝国の瓦解をいっそう進めただけだった。

538年に教皇権が地上の王座に就いたとき、第3回オルレアン公会議で日曜法が制定された。こうして、606年にムハンマドは預言者としての働きを開始し、歴史家が「背教した教会への鞭」と呼ぶことになるラッパを象徴的に示した。606年のムハンマドの宣教に始まる第一の災いと第二の災いの歴史は、第七のラッパが鳴り響いた1844年10月22日に終結した。

第二の災いは過ぎ去った。見よ、第三の災いが間もなく来る。第七の御使いがラッパを吹き鳴らした。すると、天には大きな声が起って言った。「この世の国々は、私たちの主とそのキリストのものとなった。彼は世々限りなく統べ治める。」ヨハネの黙示録 11:14、15。

最初の二つの災いの時代において、東ローマの首都コンスタンティノーブルは1453年に陥落し、西方の教皇ローマは1798年に致命的な傷を負った。「背教した教会に対する鞭」は、世俗ローマと宗教ローマの双方を打ち倒した。現代のローマの三重連合は、米国で間もなく到来する日曜法によって完成する。

「米国のプロテスタントは、隔たりを越えて手を差し伸べ、心霊主義の手を握ることにおいて先頭に立つだろう。彼らは深淵を越えて手を伸ばし、ローマの権力と手を結ぶだろう。そしてこの三者連合の影響のもとで、この国は良心の自由を踏みにじる点でローマの跡を追うことになる。」『大論争』588。

その時、第三の災いのイスラムは、現代ローマが日曜礼拝を強制していることに対して、神の裁きを、神が異教ローマと教皇ローマに対して行ったのと同様に執行するであろう。異教ローマに対しては、神は最初の四つのラッパを用いて、476年までに西ローマ帝国の首都におけるローマの統治を終わらせた。というのも、476年以後、その都市の支配者にローマ人の血統を引く者は一人もいなかったからである。1453年までに、イスラムの第五のラッパは東ローマにおけるローマの統治を終わらせた。1798年までに、イスラムの第六のラッパの歴史において、かつて十に分割されたヨーロッパ諸国に対する教皇の統治は終わりを迎えた。ローマの世俗王国は西も東も、またローマの宗教的王国も、異教の太陽崇拝が強制されたのちに、その没落がもたらされた。

アメリカ合衆国の民はこれまで恵まれた民であった。しかし、彼らが宗教の自由を制限し、プロテスタンティズムを放棄し、教皇主義を容認するとき、彼らの罪は満ち、『国家的背教』が天の書物に記録されるであろう。この背教の結果は国家的破滅となる。Review and Herald, 1893年5月2日。

預言の三重適用は、最初の二度の成就の特質に基づいて、預言の最終的成就の特徴を定める。2001年9月11日、第三の災いが歴史に到来した。第三の災いは第七のラッパであり、そのラッパは1844年10月22日に吹き鳴らされ始めたため、当初はその日に到来していた。しかし古代イスラエルと同様に、現代イスラエルは反逆を選び、働きを完了する代わりに荒野での放浪の時代を招いた。このため、第三の天使の封印の時は延期され、2001年9月11日に再び始まった。

「四十年のあいだ、不信、不平不満、反逆が、古代イスラエルをカナンの地から締め出した。同じ罪が、現代のイスラエルが天のカナンに入るのを遅らせてきた。いずれの場合にも、神の約束に非はない。私たちをこれほど長い年月、罪と悲しみのこの世に

とどめてきたのは、主の民を自認する者たちの間にある不信、世俗、献身の欠如、そして争いである。」 Selected Messages 第2巻、69頁。

神は変わらず、与えられている光に応じて裁かれる。現代イスラエルは古代イスラエルより多くの光が与えられており、私たちは「同じ罪が現代イスラエルの天のカナンへの入りを遅らせてきた」と知らされている。もし現代イスラエルが、古代イスラエルが責任を負わされていた光に対してのみ責任を負わされていたのなら、それだけでも十分であっただろう。だが彼らにはそれ以上の光が与えられていた。したがって、もし「同じ罪」が「古代イスラエル」を「四十年」荒野をさまよわせたのだとすれば、1863年の反逆において現代イスラエルが「荒野」に追放されたというだけでなく、彼らはそこで確実に死ぬ運命にもあったのである。彼らの「罪」が第三天使の働きを今に至るまで遅らせてきた。

天使は言った。「第三の天使は、天の穀倉のために彼らを束にし、あるいは封印している。」この小さな群れは、厳しい試練と戦いをくぐり抜けてきたかのように、心労でやつれているように見えた。そして、まるで雲の背後から太陽がいましたが昇り出て彼らの顔を照らしたかのように見え、そのため彼らは、勝利は目前であるかのように、凱然とした表情を浮かべているように見えた。『初期の著作』 88。

古代イスラエルを荒野で死ぬ運命へと追いやったのと同じ罪が、1844年10月22日に到来した第三の天使の働きを遅らせてきた。

イエスが至聖所の戸を開かれた後、安息日の光が見え、神の民は、昔イスラエルの子らが試されたように、神の律法を守るかどうか試された。私は、第三天使が上を指さし、失望した人々に天の聖所の至聖所への道を示しているのを見た。彼らが信仰によって至聖所に入ると、イエスを見だし、希望と喜びが新たに湧き上がる。私は、彼らが振り返り、イエスの再臨の宣言から、自分たちの経験をたどって1844年に時が過ぎたときに至るまで、過去を見直しているのを見た。彼らは自分たちの失望が説明されるのを見て、喜びと確信が再び彼らを生き生きとさせる。第三天使は過去と現在と未来を照らし、神がまことにその神秘的な摂理によって彼らを導いてこられたことを、彼らは知る。『初期の著作』 254頁。

第三の天使は封印の天使であり、1844年10月22日に到来したが、その働きは古代イスラエルが荒野で滅びた原因となったのと同じ罪によって遅らされた。1863年の反逆によって生じた遅れは第三の天使の働きの遅延であり、そのため封印は百年以上にわたって妨げられ、遅延させられてきた。

[民数記 32:6-15、引用。] 主なる神はねたむ神であるが、しかしこの世代のご自分の民の罪と背きに対して長く忍耐しておられる。もし神の民がその御旨に従って歩んでいたなら、神のわざは前進し、真理のメッセージは地の全面に住むすべての人々に伝えられていたであろう。もし神の民が神を信じ、そのみことばを行う者となり、その戒めを守っていたなら、天を飛びながら、一人の御使いが、地に風を吹きつけるためにそれを解き放とうとしていた四人の御使いに向かって、「とどめよ、とどめよ、四方の風を。わたしが神のしもべたちの額に印を押すまで、地に吹きつけさせるな」と叫ぶことはなかったであろう。しかし、民は古代イスラエルと同じく、不従順で、恩知らずで、不敬虔であるゆえに、すべての者が大声で宣べ伝えられる最後のあわれ

みのメッセージを聞くことができるように、時は延ばされている。主のわざは妨げられ、封印の時は遅らされてきた。多くの者は真理を聞いていない。しかし主は彼らに聞いて回心する機会をお与えになり、神の大いなるわざは前進していくであろう。Manuscript Releases 第15巻、292ページ。

2001年9月11日、第三の天使が再び到来し、1863年の反逆以来遅らされていた封印の時期が再開した。それは、封印の時期の始まりを告げる第七のラッパでもある、第三の災いとしてのイスラムの到来であった。封印の時期は、1844年10月22日に第三の天使が到来し、第七のラッパが鳴り始めたときに始まったが、そのラッパは妨げられ、遅れた。

私が海の上と地の上に立っているのを見たその御使いは、天に向かって手を上げ、世々限りなく生きておられる方、すなわち天とその中にあるもの、地とその中にあるもの、海とその中にあるものを創造された方にかけて誓って言った。「もはや時は延ばされない。しかし、第七の御使いの音がする日、彼が吹き鳴らし始めるときには、神の奥義は成就する。神がその僕である預言者たちに告げられたとおりである。」ヨハネの黙示録 10:5-7。

第七の天使の「声」は、ニューヨーク市の巨大な建物が打ち倒されたときに降りてきた黙示録第十八章の天使の声である。

これらのことの後、私は、天から降りてくるもう一人の天使を見た。その天使は大いなる権威を帯び、その栄光によって地は輝いた。彼は力強い大声で叫んだ。「大いなるバビロンは倒れた、倒れた。彼女は悪魔たちの住みか、あらゆる汚れた霊の巢窟、あらゆる汚れた憎むべき鳥の檻となった。というのは、諸国の民はみな彼女の淫行の怒りのぶどう酒を飲み、地の王たちは彼女と姦淫を行い、地の商人たちは彼女の贅沢の豊かさによって富を得たからである。」黙示録 18:1-3

降りてくる力ある天使の「声」が、天使たちに、解き放たれてその行く先々に死と破壊をもたらそうとする「怒れる馬」にたとえられた四方の風を押さえておくよう命じる。

神の御使いたちはその命に従い、地の風を押しとどめ、神のしもべたちが額に印を押されるまで、風が地にも海にも、またどんな木にも吹きつけないようにしている。力ある御使いが、東（または日の出）の方から昇って来るのが見える。この最も力ある御使いは、その手に生ける神の印、すなわち、ただおひとりで命をお与えになり、不死、永遠のいのちが授けられる者たちの額にしるし、または刻印を記すことのできるお方の印を持っている。この最上位の御使いの音が権威をもって四人の御使いに四方の風を押しとどめておくよう命じ、この業が行われるまで、また彼がそれらを解き放てと号令を下すまで、それを保たせたのである。Testimonies to Ministers, 445.

四人の天使に風を止めるよう命じる天使は、その栄光によって地を照らす黙示録第十八章の天使であり、彼の「強い声」は第七の天使の声である。

そして、私たちの考察と慰め、励ましのために、黙示録7章には何と見事な描写が与えられていることでしょう。四人の御使いは、地上での働きを行うよう命じられている。しかし、ご自身を身代金としてお与えになり、この世界を贖い取られたお方には、選ばれた少数の者がいる。それは誰か。神のすべての戒めを守り、イエスの信仰を持つ者たちである。

ヨハネの注意は別の光景に向けられた。「そして私は、生ける神の印を持ち、東から上ってくるもう一人の御使いを見た」（黙示録7:2）。これは誰か、契約の御使いである。彼は日の出る方から来られる。彼はいと高きところからの曙光である。彼は世の光である。「彼のうちにいのちがあった。そのいのちは人の光であった」（ヨハネ1:4）。これこそイザヤが描写しているお方である。「私たちにひとりの子が生まれ、私たちにひとりの男の子が与えられた。支配はその肩にあり、その名は、不思議な方、助言者、力ある神、永遠の父、平和の君と呼ばれる」（イザヤ9:6）。彼は、地と海を損なう権威を与えられていた天の御使いの群勢にまさる方として、こう叫んだ。「私たちが私たちの神のしもべたちの額に印を押すまで、地にも海にも木々にも害を加えるな」（黙示録7:2,3）。

ここに神性と人性が一つに結ばれている。四人の天使には、彼の号令を受けるまで四方の風を押しとどめるようにとの命令が与えられる。全章を読みなさい。「害を加えるな」という叫びは、回復者、贖い主によって発せられる。

「ある務めが成し遂げられるまで、裁きと怒りは、ほんのしばらくの間だけ抑えられることになっていた。警告と憐れみの最後のメッセージは、金銭への利己的な愛、安逸を愛する利己心、そしてなされるべき働きを行うのに人間が不相当であることによって、その働きが遅らされてきた。栄光によって地を照らすべき天使は、天の光が彼らを通して輝くことのできる人間の器を待っており、こうして彼らは協力して、その神聖で厳粛な重要性をもって、世界の運命を決することになるメッセージを告げるのである。」『Manuscript Releases』第15巻、222。

キリストである第三の天使は、1844年10月22日に到来した封印の天使でもあるが、神の民の不従順のため、十四万四千人に印を押すその働きは2001年9月11日まで遅らされた。すると第三の災いのイスラムがニューヨークの巨大な建物を打ち倒し、封印の過程が始まった。その時点で、諸国は「怒ったが、なお抑えられていた」。黙示録第十八章の第一の声は、神の民に印が押される間、四人の天使に「とどめよ」と命じる声である。

イエスはいつも、初めによって終わりを示す。そして1993年2月26日、第三の災いのイスラムが世界貿易センター北棟の地下駐車場でトラック爆弾を爆発させた。この爆発により建物は大きな損傷を受け、6人が死亡し、さらに1000人以上が負傷した。攻撃は両塔を倒壊させるには至らなかったが、米国本土における重大なテロ行為であり、2001年9月11日の出来事を予兆するものだった。

封印の時は2001年9月11日に始まったが、その8年前に前触れがあった。2023年10月7日のイスラム勢力によるイスラエルへの攻撃は、封印の時の終わりへの前触れである。第三のわざわいの預言的特徴は、第一と第二のわざわいの預言的特徴に基づいて確立されている。黙示録第九章の冒頭の数節では、十四万四千人に印を押すことが示されている。

その件は次回の記事で検討します。

もしこのような場面が到来し、罪ある世界にこれほどまでの恐るべき裁きが下るとすれば、神の民はどこに避け所を見いだすのか。憤りが過ぎ去るまで、彼らはいかにして守られるのか。ヨハネは、自然の諸要素-地震、暴風、そして政治的争乱-が四人の天使によって押さえられているさまを見ている。これらの風は、神が解き放てと

命じられるまで、抑えのもとにある。そこにこそ、神の教会の安全がある。神の御使いたちは神の命に従い、地の風を押しとどめて、神のしもべたちの額に印が押されるまで、風が地にも海にも、どの木にも吹きつけないようにしている。力ある御使いが東（または日の出の方）から上ってくるのが見える。この最も力ある御使いは、その手に生ける神、すなわち命を与えることのできる唯一のお方の印を持っている。このお方は、不死、永遠のいのちが授けられる者たちの額に、しるし、すなわち銘を記すことのできる方である。この最高の御使いの声こそ、四人の天使に対し、この業が成し遂げられるまで、また彼が解き放てとの召しを与えるまで、四つの風を抑えておくよう命じる権威を持っていたのである。

世と肉と悪魔に打ち勝つ者は、生ける神の印を受ける恵まれた者となる。手の清くない者、心の潔白でない者は、生ける神の印を受けることはない。罪を企て、それを行っている者は、顧みられずに過ぎ去られるだろう。神の御前において、大いなる反型の贖罪日に自分の罪を悔い改め告白する者の立場に身を置いている者だけが、神の保護に値する者として認められ、印をつけられる。救い主の現れを、朝を待つ者よりもさらに熱心に、切に、ひたすら見張りつつ待ち望む者たちの名は、印を受けた者たちのうちに数えられる。真理のあらゆる光がその魂に輝いているのに、公言する信仰にふさわしい行いを持つべきはずでありながら、罪に誘惑され、心に偶像を立て、神の御前で自らの魂を墮落させ、さらに自分と共に罪に加わる者をも汚す者は、命の書からその名を消し去られ、真夜中の暗やみの中に取り残され、そのともしびと共に器に油を持たないままとなる。「わたしの名を恐れるあなたがたには、義の太陽が上り、その翼にはいやしがある。」

「神のしもべたちに施されるこの封印は、幻のうちにエゼキエルに示されたものと同じである。ヨハネもまた、このきわめて驚くべき啓示の目撃者であった。彼は、海と波がどよめき、人々の心が恐れあまり挫けるのを見た。彼は、地が動かされ、山々が海のただ中に移され（これは文字どおり起こっている）、その水がどよめき騒ぎ、そのうねりによって山々が震えるのを見た。彼には、災厄、疫病、飢饉、そして死が、その恐るべき使命を果たしているさまも示された。」『牧師たちへの証言』445頁。